(4) 改良水路(魚道)の効果

平成16年3月にビオトープ流末に新設したメダカ魚道は、ビオトープ沿いの環状道路を挟んで、外部水路とビオトープの連続性確保の目的で新設したものである。

その効果については、本年度夏季と秋季に確認調査を予定しており、現在までに夏季の調査を終了した。

魚道の概観を以下の示す。

＜平成16年5月の状況＞



＜平成16年7月の状況＞



メダカ魚道については、盛夏期の渇水時に一時的に通水が途切れることがあったが、降雨後は再び通水が維持された。

魚道内の生物を確認したところ、メダカは5個体しか確認出来なかったものの、ドジョウおよびメダカとほぼ同体長のモツゴの他、ゲンゴロウやガムシの幼虫等が多数確認され、これらの生物が十分魚道内を行き来することが可能であることが証明された。

また、魚道下端にメダカを100尾放流し、遡上の可否を確認したところ、2時間後には、下端部から35個体が移動し、少なくとも8個体のメダカがビオトープ脇の魚道まで遡上した。下端部から最遠の確認場所は、A地点(上記右写真)で、1個体が確認された。

さらに4時間後には、下端部から54個体が移動しており、少なくとも13個体が同様に遡上した。最遠の確認場所はB地点(上記右写真)で、2個体が確認された。

夏季の調査時は、メダカの遡上分散期から大きく遅れた時期であったが、これらの調査結果からみて、メダカにとって十分遡上可能な構造であるものと判断され、翌春の遡上分散期には、より多くのメダカの遡上が期待できると考えられる。

なお、今後は秋季に同様の調査を行い、越冬前における移動分散時の状況を調査する予定である。

(5) 周辺水路の状況

環状道路沿いに拝眉したポーラスコンクリート水路は、メダカの生息および移動に配慮して選定したものであるが、設置時とその後の状況の変化については以下の写真のとおりである。

平成15年には、水路内に植物が繁茂し始め、近自然的な様相となり、メダカ等生物の利用が確認された。

●平成14年5月春施工直後の状況

＜ポーラスコンクリート水路＞



＜メダカ枡＞



●平成15年5～7月の状況





＜水路内の状況＞ ※植物の根が水路の壁面に入り込んでいる

